

第三章 日中国交正常化

1 功を焦った田中角栄

一九七二年、突然、日本と中国が国交を正常化した。第二次世界大戦が終結した年から二十七年後のことである。しばらくはその意味が分からなかった。高度成長期でもあり、確かに国民の多くは浮かれていたかも知れない。

先人の苦勞を土台に国民が血の滲むような努力をし、8年前には東京オリンピックが、そして2年前には、大阪で万国博覧会が大成功を収めていたのである。ある意味で国民も舞い上がっていたのかも知れない。

有頂天になっていた政治家は企業と癒着し、金に眼がくらみ、自己抑制を失っていた。経済成長に浮かれていた国民も、欲望に眼がくらんで、品格を失った政治に寛大になり、「金と数」にものを言わず政治家が台頭していったのである。

金権政治の代名詞である田中角栄氏が「金と数」にものを言わせて首相になり、功名の欲に駆られ、国民感情を無視して独善的にのめり込んでいったのが「日中国交正常化」であり、その後の国内産業空洞化に繋がる経済支援が始まった。

独善的であった何よりの証拠は、中国が、日本ではなく田中家に感謝をしていることである。田中角栄氏の法要には、中国駐日公使が田中家を訪れて参拝するなど個人に謝意を表しているのが、国交正常化が独断であったことの何よりの証であろう。つまり、何らの戦略性もない外交が始まったのである。

「反日」教育を行い、日本に敵対している国が、「日中友好」を独断で進めた田中角栄氏を、「井戸を掘った人」としていること自体、国家の交流が異常であることを物語っていると思うのだがメディアがあまり指摘しない。

日本は、そういう国になっていたのである。角栄氏の娘、田中真紀子氏は勘違いをしているようだが、父親は祖国を危機に曝した政治家と言われても仕方がないほどの、外交の過ちを犯した歴史上の人物ということになるのである。

政治は単なる個人企業ではなく、国民の幸せの原点とも言える、「国家の名誉」を守ることから始めなければならぬ。政治の世界で独断が戒められるのは、過ちを最小限に留めることが基本になっているからだと言つことができよう。

国民は、準備不十分のまま、訳が分からない状態で「日中友好」に巻込まれていたが、それは今も続く違和感である。「反日」教育で日本が非難されようが、国際社会で侮辱されようが、「日中友好」が最重要だというトラウマがこつとして生まれたのである。

少なくとも中国は、共産党の「一党独裁国家」である。人民は人権を束縛され、言論さえも統制された管理社会であり、法治国家の自由世界に危険な国家であることぐらい、政治家でなくても分かっていたものであり、警戒をすべきであったのである。

危険度が分らないにしても、交流に慎重さが求められるのは自由世界の常識であろう。準備不足で安易に行った「日中国交正常化」が、その後の日本及び国民を「正」「邪」さえも判断できない民族にしてしまったと言つこともできよう。

日本では中国を美化し、中国の「反日」教育など歯牙にもかけない論評で、暴虐無人をとがめる反論は「右傾化」とするなど、「正」「邪」が逆転した国家は世界の非常識として不思議がられてもおかしくない。

日本を侮辱し「反日」教育を続ける中国、韓国等は近隣諸国とはいえ「元寇の侵略」で日本人を大虐殺した民族であることを忘れてはならないだけでなく、先人の決断の意味を、静かに振り返つてみるべきなのである。

「友好」を希えばこそ行つ日本の主張を、「右傾化」とする政治家とメディアなど、現在の考え方が日本から淘汰されないかぎり、正常な国家には到底なり得ないのは理解できても、あきらめられるものではない。

早すぎた国交正常化の独断と、今・犯している親中派の失政、「日中友好」を見直し、日本が歴史を見つめ直す機会を待たなければならぬのである。

田中角栄氏の独断が招いた、日本精神の崩壊は重大な問題であり、回復は容易ではない。中国が、日本に敵対する「反日」教育を活発にし始めたのも、日本に親中派という、妙な人種が蔓延つてからであり江沢民が主席になってそれがピークを迎えた。日本と中国人の洗脳システムが完成したのは親中派の存在抜きでは語れない。

今や中国への反論は、余程の勇気が必要となるなど、敗戦のけじめさえ付けられない事態でのめりこんだ「日中友好」は、日本を泥沼に沈めてしまった。「金と数」の論理を実践した田中角栄氏は、その意味で国家に大きな爪あとを残したと言えるだろう。

歴史は「継続性」が重要とはいえ過ちを正す勇気を持たねばならない。「元寇の侵略」と「植民地政策」は日本と韓国が互いに忘れてはならない歴史であり、日中戦争についても、戦争は、互いの責任であることを主張すべきなのである。

中国が、共産主義「一党独裁国家」であり、人民には言論の自由も思想の自由もないことは、彼らに反対する政党もなければ、団体もなく、人民の意見や、意思を封じ込めることなど日常茶飯事であることから、「反日」教育が、自由自在であることも、中国との交流に慎重でなければならぬ理由としては十分であろう。

田中角栄氏の「金権政治」は小泉首相らが一部を破壊したが、次の決断は中国の生贄となつている「製造工場の撤退」と「歴史認識」の正常化であろう。

日中は歴史の正常化こそ重要であり、「南京大虐殺」30万人などは、当時の指導者・毛沢東氏の発言でも分かる、「ねつ造」の歴史が、子供達にすり込まれていることが問題で「やがて分かる時が来るだろう」では困るのである。